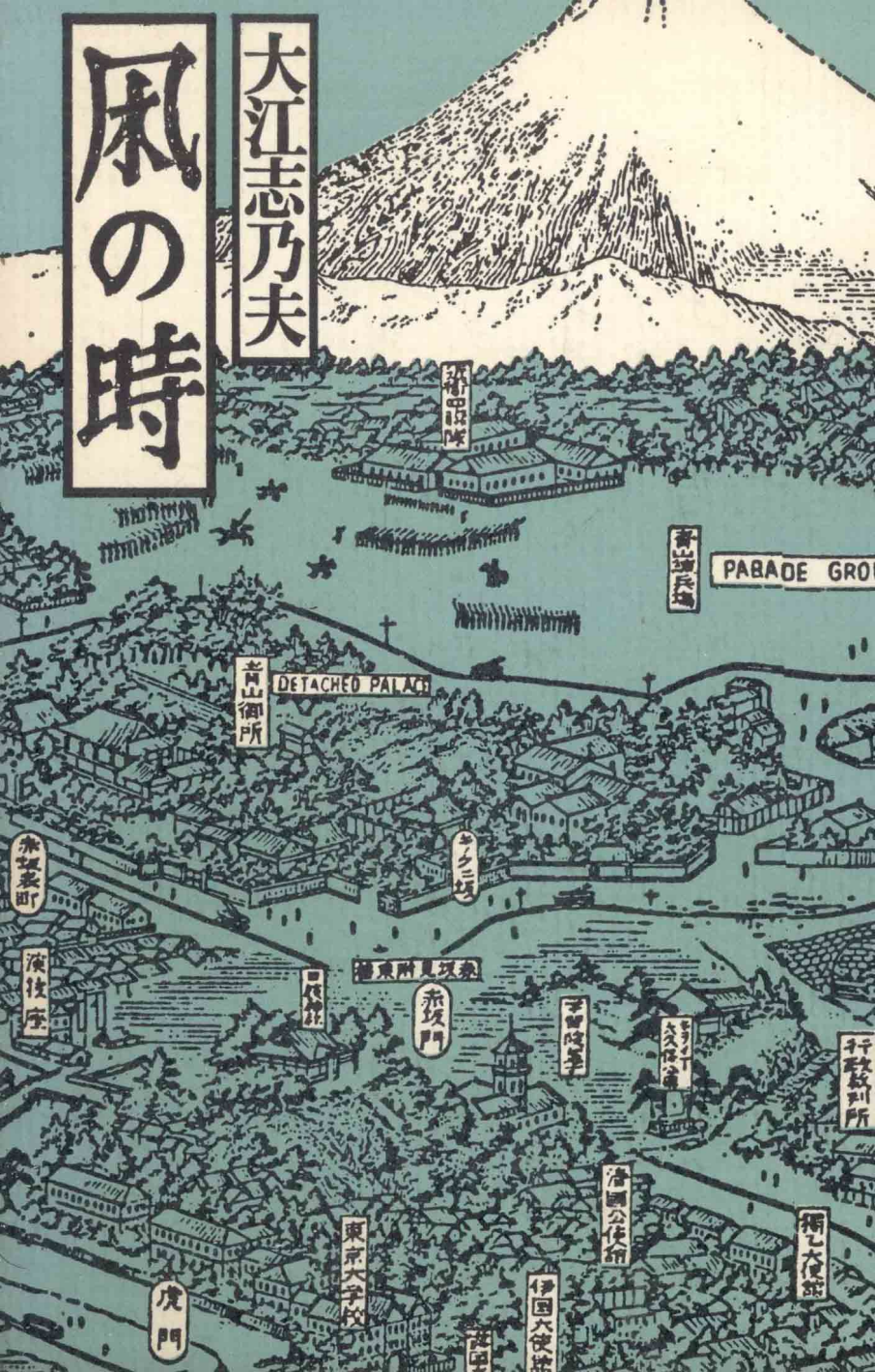


風の時

大江志乃夫



赤坂御所

青山御所

DETACHED PALACE

PABAOE GRO

赤坂御所

演習場

赤坂御所

赤坂御所

赤坂御所

赤坂御所

赤坂御所

赤坂御所

赤坂御所

赤坂御所

赤坂御所

赤坂御所

赤坂御所

大江志乃夫

風の時



風こがらしの時とき

一九五年三月二十五日初版第一刷発行
一九五年六月十月初版第三刷発行

著者 大江志乃夫

発行者 布川角左衛門

発行所 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二八

電話東京二一七六五 振替東京六四三三

印刷所 厚徳社

製本所 積信堂

装丁者 田村義也

目次

一	小石川後楽園	7
二	赤坂檜町(一)	25
三	巨福山建長寺	41
四	赤坂新坂町	59
五	麻布龍土町	77
六	内藤新宿	93
七	青山北一丁目	110

八	ロンドン	128
九	横須賀不入斗町	147
十	神田三崎町三丁目	166
十一	芝片門前町	186
十二	大久保射撃場	203
十三	日枝山王社	220
十四	千駄ヶ谷町穩田	238
十五	二廓四宿	255
十六	武蔵野	275
十七	赤坂檜町(二)	294
十八	青山南一丁目	312
十九	淀橋柏木	331
二十	山の手線	349
二十一	上海	369

	二十二	三宅坂	388
	二十三	京橋南鍋町	408
	二十四	姫路城	428
	二十五	市ヶ谷富久町	447
	二十六	永田町一丁目	467
	二十七	茅ヶ崎海岸	486
		参考文献	506
		あとがき	511

用^{こがらし}
の
時^{とき}

一 小石川後楽園

東京の五月のはじめをいろいろ新緑が目にあぶしかった。

その新緑の奥深くにつぎつぎと吸いこまれていくひとびとの胸は、いつそうまぶしく輝いていた。

神田川にそって広大な敷地をしめる東京砲兵工廠がある。工廠の正門をくぐって、真新しいカーキ色の軍服を着た陸軍の軍人たちが、三々五々、正門からさらに左手の唐門のなかに姿を消していった。一年まえに制定されたばかりの新式の軍服姿の軍人たちであった。

右胸に金色の参謀飾緒かざりおびをつけているものも、つけていないものもいた。だが、ほとんど全員が授与されたばかりの燦然と輝く金鵄勲章きんぎすを佩用はいようしていた。あるものはそれを右肋につけ、あるものはそれを喉下のどしたにつるし、あるものはそれを左胸にさげていた。

右肋のそれは功二級、喉下のそれは功三級、左胸のそれは、功四級か功五級であった。多くが旭日章に金鵄勲章を併佩していたが、金鵄勲章だけしかつけていないものもいた。それは、最近おこなわれたばかりの日露戦争の論功行賞で、かれらの功績がどう評価されたかを示していた。

功四級以上の金鶏勲章だけをつけているものは殊勲甲、旭日章と金鶏勲章を併佩しているものは殊勲乙、旭日章だけのものは勲功の行賞である。さすがに、年功の言いかえにすぎない功労を示す瑞宝章をつけているものはいなかった。

この服装は、その日ここで、なかば公式の会合が開かれることを示していた。金モールとありつたけの勲章をかざりたてた黒の正装でなく、カーキ色の軍服に所持する最上位の勲章ひとつだけを佩用するのが、単独の軍装あるいは通常礼装の定めであった。

おなじ等級の勲章のうちでは金鶏勲章が最上位とされる。殊勲甲で標準より一級上の功四級以上の行賞をうけたものは、所持する勲章のなかで金鶏勲章が最上位となる。金鶏勲章所持者にかぎって、所持する最上位の勲章のほかに金鶏勲章を併佩することになっていた。

堀をめぐらした砲兵工廠の広大な敷地にかこまれて、旧水戸藩の名園、小石川の後楽園があった。

現在の後楽園二万坪の庭園は東南のすみが突きでたかたちになっており、その先端に庭園の東門がある。この突きでた部分は、もともと後楽園とは別のかつての水戸藩邸の内庭の一部であった。むかしは広かった内庭の大部分は、工廠のあいづく工場拡張のたびごとに工場敷地とされ、つぶされていった。

日露戦争後、わずかに残った内庭の部分は、砲兵工廠の庭園として職員たちの散策や休息の場となっていた。現在の後楽園東門はなかった。内庭と後楽園をへだてていた堀に唐門があり、旧水戸藩以来この唐門が後楽園の門であった。唐門は太平洋戦争の戦災で焼失し、旧内庭が後楽園

に取りこまれ、変形の平面をもつ現在の後樂園庭園となった。

関東大震災まで、園内には多くの建物があつた。そのうち大きな建物は涵徳亭^{かんとくてい}で、明治十三年に失火で全焼したが、翌年再建された。いまでも集会などに利用されているが、現在の涵徳亭は明治四十四年に移築され、位置がわずかに動いている。

後樂園の周囲はすべて砲兵工廠の敷地であつた。後樂園は、陸軍部外の民間人からはうかがい知ることができない、陸軍の禁苑であつた。天子の園囿^{えんぐ}を意味する禁苑という言葉を使つても、決しておおげさではなかつた。明治十九年に天皇ついで皇后をむかえ、実際のあつかいも禁苑御料地に準ずるものとされていた。

来日した国賓たちも後樂園をおとずれた。当時の日本の公的な園遊会の会場としては、皇室所有の浜離宮につぐ地位をしめていた。一般人には公開されず、国家の慶事にあたって、砲兵工廠の職員職工、日本赤十字社員にとくに参観を許されることがあつた。

後樂園でおこなわれた最大の公式園遊会は、明治三十九年一月にひらかれた満州軍凱旋祝賀会であつた。主催は寺内正毅^{まさかた}陸軍大臣で、午前中は各皇族、満州軍総司令官として凱旋した大山巖^{いわた}元帥以下、元老から将官級軍人までの百六十余名、午後は軍、官、および報道関係者など八百七十余名を招いての大園遊会であつた。

これを最後に、後樂園は明治期の公的な庭園社交場としての地位を新宿御苑にゆずることになる。

明治三十九年四月三十日、東京青山練兵場つまり現在の明治神宮外苑で日露戦争の凱旋観兵式

が舉行された。翌五月一日、觀兵式参加の將校全員をふくむ六千三百人を招待しての大野宴が、天皇臨席のもとにおこなわれた。

大名屋敷の回遊式庭園である後樂園は、これだけの人員を收容する野宴の会場としてはせますぎた。会場として皇室の所有地である新宿御料地が選ばれた。御料地というものの、その前身は内務省の内藤新宿農業試驗場であつた。それは六千人以上の人数を收容するに適當な大広場であつた。

御料地につうずる新道および御料地入口の行幸門が、宮内省内匠寮たくみりょうによつて突貫工事で完成された。明治日本の最大規模の野宴が盛大におこなわれた。この大野宴を機会に、御料地は新宿御苑と改称され、庭園として整備されていく。觀桜会をはじめ、皇室行事としての園遊会の会場が浜離宮から新宿御苑に移るのは大正以後である。

新宿御料地の凱旋觀兵式祝賀大野宴からちょうど一年後、後樂園の唐門を久しぶりに陸軍の高級將校たちの軍服姿がにぎわわせた。朝早くから、各種の酒や料理、それに寿司や蕎麦の模擬店をだすための大道具までもが、工廠の正門をとおつて管理事務所に持ちこまれていた。

正門の守衛には会合の名は知らされていなかった。しかし、公式とはいえないにしても決して内輪ではない規模の、陸軍部内の園遊会が開かれることがわかつていた。

会がはじまつた。主人公が登場した。長身の一步兵中佐である。詰襟の軍服の喉下に金鷄勲章がつるされている。中佐で功三級、いうまでもなく、殊勲甲の行賞に浴したことをはっきりと示していた。

招かれた将校の多くはその顔を知っていた。田中義一歩兵中佐、日露戦争の作戦軍の総司令部である満州軍總司令部で、児玉源太郎総参謀長、松川敏胤としたね作戦主任参謀のもとに作戦主務参謀として活躍した男である。実際の役どころは、松川が作戦部長——実際に松川の平時職は参謀本部第一（作戦）部長である——、田中が作戦課長であった。参謀本部に課制がしかれるのは明治四十一年であるが、戦後、参謀本部に復帰した田中は事実上の作戦課長であった。

田中を有名にしたのは、日露戦争中をつうじて満州軍總司令部の作戦命令を起案する責任者の地位にあった、ということだけでなかった。この戦争中の実績をよりどころとし、戦後の日本陸軍の押しも押されぬ若手の実力者として頭角をあらわしてきたことであつた。その田中の胸から参謀飾緒がはずされていた。

田中は壇上にたつてあいさつの口を開いた。

「不肖田中は、このたび、歩兵第三連隊長に補せられ、歴戦の伝統にかがやく軍旗を奉ずる光栄に浴することになりました。帝国軍人としてまことに本懐のいたりであります。」

あいさつの第一声をきいた参列の軍人たちの多くは、思わずどよめいた。

当時の陸軍は、長の陸軍、と呼ばれていた。陸軍首脳の圧倒的な部分を長州藩出身者がしめていた。陸軍の中樞部は長州藩出身者に完全ににぎられていた。日露戦争中の陸軍首脳部の配置がそのことを示していた。

内閣総理大臣

大将（在職中休職）

桂

太郎

陸軍大臣

中将

寺内

正毅

参謀総長

元帥大将

山県

有朋

満州軍総参謀長

大将

児玉

源太郎

第三軍司令官

大将

乃木

希典

韓国駐劄軍司令官

大将

長谷川

好道

侍従武官長

大将

岡沢

精

東京衛戍総督

大将

佐久間

左馬太

関東都督

大将

大島

義昌

これだけの地位を長州藩出身者がしめていた。俗に薩長藩閥というが、これにたいして、薩摩藩出身者は少数派であった。

満州軍総司令官

元帥大将

大山

巖

第一軍司令官

大将

黒木

為楨

第四軍司令官

大将

野津

道貫

鴨緑江軍司令官

大将

川村

景明

遼東守備軍司令官

大将

西

寛二郎

長州と薩摩の比率は九対五である。ほかに、九州の小倉藩出身の第二軍司令官奥保鞏^{おくやすかた}大將がいたにすぎない。小倉藩はどちらかといえば薩摩藩よりであった。

このうち、児玉は、三十九年七月、あたかも日露戦争にその知力、体力、氣力のすべてを使いつくしたかのように急死した。だからといって、長の陸軍の優位がぐらついたわけではない。しかし、長州閥の人材は先ぼそりしつあった。寺内が陸軍大臣在職九年という最長不倒の無理をしなければならなかったのも、後継者難ゆえであった。

長岡外史^{がし}という少將がいた。日露戦争中の参謀本部次長であった。小才はきくが人間がかかる、参謀本部次長といっても山県総長の使い走りの副官という役どころであった。とても長州閥の後継者のうつつではなかった。戦後、東京の歩兵第二旅団長にでていた。

日露戦争をつうじて長州出身の田中が頭角をあらわしたことは、長州閥の総帥山県をよろこばせた。山県は田中を自分のブレンにした。長州の後輩である桂や寺内ということは聞かなくとも、田中の主張には耳をかたむけた。もっとも、桂や寺内が官僚政治家としてすでに一本だちし、いつまでも山県のいうことばかりを聞いてもおれなくなったことが、山県が田中を重用した理由でもあった。

田中も存分に山県を利用した。一介の参謀本部部員の一中佐の主張としてならば問題にもされないが、おなじことが天皇の最高軍事顧問である実力者山県元帥の公式の発言というかたちをとるとなれば、話は別である。田中の主張は山県元帥の天皇にたいする建言という形式をとって、しばしば日露戦争後の日本の軍事政策の基本方針に大きな影響力を発揮するようになった。田中

は早くも、長州閥の寵児、となった。

三十九年六月に陸軍軍制調査委員兼任となった田中がつぎにつくポストは、当然、陸軍省軍務局軍事課長であると目されていた。長州閥の寵児、といえども、発言権のある地位になれば陸にあがった魚も同然である。軍人政治家への入門コースである陸軍軍事行政の中樞への道は、陸軍省の筆頭課長である軍事課長への就任にはじまる。

しかし、おおかたの予想をうらぎって、田中は四十年五月一日付をもって歩兵第三連隊長に転出した。陸軍部内はこの人事におどろいた。参謀本部部員という軍中樞の職から現場である隊附勤務への転任は、これまでの常識からすれば実質的な左遷人事であった。

会場のどよめきを無視して田中はつづけた。

「本日は、この光栄ある職に補せられるにあたって御尽力たまわった上官・先輩のかたがたに感謝の微意を表したく、またこの田中のよろこびをいささかなりとも同僚・後輩の諸官にわちたたく、ここにささやかな宴を開かせていただいた幸いです。」

この日の後樂園の園遊会は田中中佐の連隊長就任披露宴であった。

園遊会参加者のあいだではさまざまの臆測が、あるいはやかみの鬱憤ばらしを、あるいは羨望をまじえてささやかれていた。

「一連隊長のぶんざいでこんな宴会を開くなど、やはりあいつはなまいきだ。」

「図にのりすぎて、山県元帥の御機嫌を損じたのかな。」

「さすがに長閥の寵児、はでなことをやりおるのう。」